

【2014-05-25】
ブルー・アルタイルを一杯



b-svaha

混信

夕食後、何気なくラジオを聴いていたら、
ピピパ、ザーという雑音の後に、こんな会話が聞こえてきた。

女： 「何だかあなた、今夜はとっても目が異星人ぼくってよ」

男： 「そうだろうな。

なんせ、森向こうの多次元バーで、
魚人たちを相手に
異次元交流アンプリファイアー入りの
ブルー・アルタイルを一杯やってきたからね...」

女： 「ああら、やっぱりそうなのね。
これで今週は、3回目ですわね。
ふふっ、あなたも凝り性ね。

それで、今夜はどの次元へ
私をお連れなさるのかしら...」

BGMや効果音などはなかった。

そのあとの会話は、ホワイトノイズに擦れ、
次第に聞き取れなくなっていった。

(やけに早く、酔いが回ったようだなあ...)

そう思った私は、西側に向いた細長い小窓までおもむろに歩み、レースのカーテンを横に引いた。

すると、窓ガラスの真ん中に、クリスタルの鋭角を淡く刻み出したような青い星が、瑠璃の光彩に瞬いていた。

「ブルー・アルタイルへようこそ！」

そんな声を聞いた気がして、スタンドとフットライトだけが照らす、薄暗い室内を見回してみた。

もちろん、人影すら見ることはなかった。

(やっぱり、今日は疲れているな...)

私は、ビール缶の残りを一気に飲み干しベッドに体を預けると、スタンドの紐を手で辿りその夜を閉じた。

翌朝目が覚めた私は、夕べの奇妙な出来事が気になり、この地域で受信可能なローカルのFM、AM局と大手のラジオ番組すべてを調べてみた。

該当するようなプログラムは、どこも放送してはいなかった。

世の中には、不思議なこともあるものだと思いながらも、次第に、あれは酒に酔ったうえでのおかしい幻覚にすぎなかったのだという考えに落ち着きかけたある日、転寝をしていた私の夢の中に、大小のコインを重ね合わせたような形の空飛ぶ円盤が、海岸のような場所に現れた。

(あっ、こっちへくる...)

そう思うと同時に、円盤はこちら向かって一気に飛来し、私の部屋に激突するようにして消滅した。

夢はそこで終わり、私は目を覚ました。

ほんの束の間、まどろみの間に見た奇怪な夢だった。

その頃の私は、特段、宇宙船やUFOに興味があったわけでもなく、その類の映画や動画を観ていたわけでもなかったのだから、こんな奇妙な夢を見るのが理解できなかった。

ただ、夢に現れたUFOが、何らかの意思を持っているように見え、それが、部屋の小窓から見た青い星と、「アルタイル」という言葉の響きにも共通しているような気がして、時々、ぼんやりとこれらの出来事を思い返すことがあった。

コンタクト

ルアと名乗る宇宙人に、現実に出会ったのは、この夢を見た四十日後のことだった。

いつものように、ラジオで夜の音楽番組を聞いていると、流れていたメロウなジャズのメロディが急にかすれ出し、変なアクセントのある日本語の声に変わった。

「こんばんは。ルアです。

今からお訪ねしますね！」

声はそれだけで消え、また元のジャズが流れ続けた。

(おかしいぞ。今夜は、まだグラス半分も飲んでいないのに...)

うっすらと金色を帯びたワイングラスの中身を覗き込むようにして、聞こえてきた声についてあれこれと理性で紐解こうとしている私に、ドアのベルが催促するように鳴った。

あまりのタイミングに浮足立つ思いだったが、ワイングラスを持ったまま、酔った振りをして構わずドアを開けた。

そこには、年の頃は二十五、六の美形男子が、ほほ笑んで立っていた。

「やっと会えましたね」

という彼の声は、静かでありながらよく響き、ラジオから聞こえた声質をリアルで聴く感覚だった。

勢いづけに口に含んだワインを、私は思い切り吹き出してしまった。

私は男性を部屋に招き入れるとソファに掛けさせ、彼と自分のドリンクを用意することを提案し、その間に、半ばパニックになりつつある自分の思考を整理しようとした。

男が何者で、ラジオから声が聞こえたり、アルタイルという言葉が誰もいない部屋で聞こえたり、転寝で見た奇妙な夢が私にどのような関係があるのかを、ひとつずつ聞いていった。彼の話す内容の、半分は理解できなかったが、わかり得た概要は次のようなものだった。

過去世

人には過去世があるという話は、いまや一つの考え方として、かなり一般的に信じられるようになった。それを裏付けるような精神科学の研究が進んだということもあるだろう。

たとえば、当事者を置いて他には、絶対に知り得ないような、何世紀も前の特殊な情報を、10歳にも満たない少年が詳細に熟知していて、その通りの事実が後から確認されるようなケースが、異なった研究により多数集積されるならば、過去世という概念を抜きにしてそれらを説明することは不可能になる。

また、歪んだり屈曲したりする時間の概念は、当然、未来世やタイムマシンの概念にも繋がるだろう。

ルアによれば、彼は鷲（わし）座のアルタイルという恒星からやってきたという。

鷲座は、琴座とともに、七夕でよく知られる星座だ。調べてみると、地球よりは随分と若い星らしいが、ルアによれば、琴座は私たち人類の祖先の一部がやってきた場所なのだという。

かつて、私も、その星で生きていたことがあるらしい。つまり、アルタイル星人なのだそう。その時の私の名前は、『アル』と言って、彼とは双子の関係にあったのだという。

ちなみに、『ルア』は、英語では『おとり』という意味で、釣りなどでも使われる言葉だが、元来、鷹（たか）を呼び戻すための作り物から来ているそう。鷲座は文字通り、翼を広げた鷲の意味なので、ルアは、その星から私を呼び戻しに来るという意味を持たせてあるらしい。私が日本人として転生してきたのは、私とルアとの関係を示すには日本語が好都合だったからだそう。英語の lure を逆読みしても、アルにはならないが、日本語ではツインの関係が明示できるからだという。

ルアによれば、もともと、日本語も英語も、琴座や鷲座に端を発する言語らしい。

使い慣れていない言語を駆使して、一つ一つの問いに答えてくれるこの若者は、初対面の割には、なんだかとても自然体で、もともと旧知の仲だったかのような錯覚を私にもたらした。半信半疑ではあったが、内心、（実につじつまが合った話だなあ...）と妙に感心する自分に、私自身驚いていた。何かが、「そう！そう！」と、私の中でそれを援護している感覚とでもいおうか、そんなものを感じた。

一方、もう一人の理性の私は、パニックからか、平静を保つためか、にわかに現れたこの現実、真っ向から反対するかのような勢いだった。

「つまりはキミは、この僕、片山始という男を、遠いアルタイルという星から釣りに来たというわけだ！僕は、ルアーフィッシングのように、針だけで釣りあげられる、おバカなアユというわけね！？」

そう言って、アハハハ、と笑う私の声の抑揚は、まるで外国人の話す国語のようで、やたら大きく素っ頓狂に響いてしまった。かなりの皮肉を込めたつもりだが、私は、不安を見透かされた子羊のように小さく感じた。

一気に流し込んだドリンクの炭酸が、ゴボゴボと胸のあたりで木霊した。

ルアは、そんな私を見て、可笑しさにひとしきり堪えていたが、やがて体を取り直すとうろ言った。

「実に、予想した通りのリアクションだったので、おかしくて仕方なかったよ。ご免…。記憶をすっかり無くしてしまったキミにとっては、そうした反応は、ごく自然なことだよ。自分に全く関係のない話を突然聞かされたと思えば、だれだって拒絶するのが当たり前かもしれないね。

今回のキミの人生においても、それ以前の幾度とない過去世においても、僕たちアルタイル星人は、幾度となく、地球にいるキミや同僚たちにコンタクトを試み、キミたちが最初に飛来した目的を、その記憶を思い出してもらおうと努めてきた。

けれども、地球でのリアルの生活は、思っていたほど生易しいものではなく、サバイバルを賭けた暮らしの中では、そんな目的は否定するしかなかったのだと思う。そうしなければ、この星では生きていけないと信じるようになったんだね。

ところが今回は、キミは僕たちの送信波動を無視せずにキャッチしてくれた数人の仲間に入っていたんだ。

どうしてかな…？」

私の目を真っ直ぐに見て微笑んだルアは、少し小首をかしげてそう言うと、入り口のドアに向かってゆっくりと歩き出した。

彼の唇は動かなかったが、

「わが愛する兄弟、アル…。今度訪ねた時には、キミを故郷の星に案内しよう」という言葉を、どこかで聞いた気がした。

【2014-05-25】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/86377>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/86377>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/86377>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ